

ブルー・アルタイルを一杯
【2015-02-15】



その翌日は、私とみどり、リラにとっての医療班での最後の一日だった。

医療班リーダーのポニー・Cを始め、ルアやサナトリウム主管・デネビーと補佐のシグニー、コテージの夫婦、アキーラとライラ、キャンプ場やアスレチックのスタッフなど、大勢がサナトリウムのハート食堂に会し送別のパーティを開いてくれた。

私たちは、この場所にしかない食材でできた料理やフルーツ、飲み物を堪能しながら、最後の貴重なひとときを彼らと共にし、いろいろなことを話した。

私たち三人は、医療班の楽団が奏でる静かな楽の音に送られながら、彼ら一人一人にお別れをしてサナトリウムを後にした。

私たちは、来た時と同じように、白い道を下って入り口庭園の藤棚の下を抜け、高く吹き上げる噴水のそばを通り、瑠璃色の薔薇のアーチをくぐって調整ピアに着いた。

私たちは、ここまで一緒に歩いてくれたポニー・C、デネビー、シグニー、アキーラとライラと抱き合い、握手して、彼らの見送る中、ピアを渡って医療班のエントランス・ルームに戻った。

久しぶりに見る宇宙船内部は、これまでと変わらず、調和して落ち着いた雰囲気支配する静かな空間だった。

宇宙船の推進機関である噴水のそばを通ると、美しい水のような光のオーラは、前回よりも、かなり青系統の色に変わっていた。行き過ぎるクルーたちの様子や、食堂やバーにいるゲストたちの様子も、これまでより、幾分か嬉しい期待感に満ちているようにみえた。

そのことをルアに伝えたと、それは、あと二週間ほどで宇宙船がアルタイル星に到着するからだろうと教えてくれた。宇宙船はいま、フライトスケジュールに合わせて、これまでよりも速度を上げて飛行しているのだと言う。

ルアと私たち三人は、ラウンジで縞瑪瑙のテーブルに席を取り、好きな飲み物を頼んだ後、医療班での出来事を競うようにしてルアに報告した。ルアは大いに喜び、私たちの体験の一つ一つを祝福して聞いてくれた。

このあと、ルアは、私たちが医療班から戻ったことを宇宙船統括リーダー、アマデウスに報告するために、中央司令室に戻った。

私たち三人は、久しぶりにそれぞれの部屋に戻り、その日からの残りの二週間のほとんどを自由に過ごすことを許された。

みどりとリラは、医療班から持ち帰ったものを区分し、ロジスティック班から、それぞれの宛先へ向け発送手続きをしたようだ。

私は、これまでの体験内容をジャーナルにまとめたり、みどりやリラと会食し、アルタイルやベガの話の聞いたり、ひとりでラウンジのソファに座り、星空間のパノラマを見て過ごした。

体内時計が夜になる頃にはバーに行き、屈託のないAGを相手に好きなドリンクを飲みながら、彼（女）からいろいろな話を聞くことを楽しんだ。彼は、私が何を知りたいのか、何を言いたいのかを素早く察知する能力をもっているが、最後まで私の言葉をよく聞きくことのできる、聞き上手だった。話の途中で論旨を誘導したり、言葉尻を捉えたり、逸脱させるようなことは一

度もなかった。その点でも、彼女は一流のバーテンダーだった。AGはいまや、この宇宙船の中で、私にとってはなくてはならない存在となっていた。これも何かの縁なのだと信じている。彼女のような両性具有の存在が、いつの日か地球にも現れるのだろうか...

こうして二週間が過ぎ、宇宙船は、無事予定通りにアルタイル星の星間ターミナルに到着した。

前日には、最上階の会議室に宇宙船のクルー全員とゲストらが集合し、アマデウスの挨拶があり、ルアからは、宇宙船の今後の活動とフライト予定についての話があった。

宇宙船は、ドックで詳細なチェックアップを受けたあと、しばらくの休養に入ることだった。

私たち三人は、アマデウスやほかのクルーたちに別れの挨拶をし、ルアに連れられて宇宙船を降りると、ターミナルにある波動審査局というところで簡単なチェックを受け入星許可を得た。

私たちは、ターミナルで小型宇宙船をチャーターし、ルアとリラの住む家に向った。家は、森林の多い地域の小高い丘の上にあった。

避暑地の別荘のように点在する家々から見て、人口は少ないことがわかった。私たちはそこに三日間滞在し、彼らの暮らしぶりを共に体験した後、みんなでみどりの家に向った。

彼女の家は、海浜の松の木のような樹林に囲まれた砂丘の上であり、家の広いテラスからは、百八十度、蒼い空と海を見下ろすことができた。こちらも人口は少なく、家と家の間は、たいてい一キロくらいは離れていた。

みどりは、何人かの仲間たちと動物たちと暮らしながら、海洋生物の保護の仕事に携わっていた。農園のある庭と下の砂浜には、常時、小型宇宙船が停泊していた。私たちはここにも三日間滞在し、人々の暮らしぶりを体験することができた。

次に、私たちは、宇宙船の飛行モードをパラレル次元にセット、私とみどりが夫婦だった頃の住まいと、その頃よく通っていた「森向こうの異次元バー」を訪れた。

当時の私とみどりの様子、子供たちとの夕食の様子、異次元バーの魚人たちのユーモラスな言行や、仲間たちと話していたことなど、初めて見聞きするものばかりなのに、懐かしさに涙が出て、笑顔も笑いも出る、不思議なデジャビュ体験の連続となった。

このあと、みどりとリラは私にお別れを言い、名残り惜しくも、それぞれの暮らしに戻っていった。

私とルアは、その後三ヶ月に渡り、アルタイル星のいろいろな地域や著名な場所を訪れ、この星についての私の見聞も徐々に広まった。

総じて述べるに、アルタイルには、コミュニティは多々あるが、国家という概念はなく、国境もない。法律も憲法もないので政府も政治家も存在しない。コミュニティが緩く繋がりながら連携を保ち、それを十名程度の長老と呼ばれる人たちがただ見守っている。強いて言えば、それがアルタイルの政治かもしれない。

警察機構や軍隊はないが、フォース・キーパーという能力を持った人たちが、星全体と各コミュニティの保全を見守っている。長老たちは、この人たちのことも見守っている。他の星や星団から侵略を受けた場合も、彼らには争うというオプションはなく、マヤ族の取ったような別次元への退避があるだけだという。

星には貨幣が存在しないので、人々がそのためにあくせく生活をするということはない。経済は自発的な奉仕で成立し、奉仕はごく自然の行為であり、そこに義務感はない。

アルタイル人にとっては、経済もお金も同じことであり、どちらもエネルギーの流れであり、バランスのあり方に過ぎない。彼らからすれば、金融や為替相場による利子や利ざやという考え方は、この流れをせき止め、バランスを崩すための不公平な道具だという。

各コミュニティにはエナジー・キーパーがいて、もし不必要に与えるだけの人、受け取るだけの人がいれば、必要なアドバイスやカウンセリングを行う。本来は自然であるべき奉仕や仕事が、極端にどちらか一方に傾くことのないように、エネルギー授受をニュートラルに保つことが彼らの仕事だ。

エナジー・レベルは多面的、多次元的に読み取られるため、肉体的にまったく働けない人であっても生活は保障され、誰もそれを憂いたり咎めたりはしない。どんな人にも、奉仕している分野は必ずあることを、誰もがよく知っているからだ。その人がいること自体が奉仕になっているのだという。

よって、アルタイルには貧困層も、スーパーリッチ層も存在しない。普通層であることで、万人が満ち足りた暮らしをする条件が、自然と整ってしまうのだ。

三ヶ月の星めぐりの最後に、ルアと私はアルタイルの太陽神殿を訪れた。

神殿は、いくつかの色の、光の雲のゲートを潜り抜けた先に、忽然とその姿を現した。

私たちは小型宇宙船で出かけたはずだが、いつの間にか鳥の姿に変わり飛行していた。

すみれ色の最後のゲートをくぐり着地し、参道を歩いていくと、本殿の入り口に人影が現れこちらに歩いてきた。

背の高いその男性は、赤味がかった髭があり、自らをジェルマン伯爵と呼んで微笑んだ。

「この人が、今回の、キミの旅のコーディネータなのだよ」

傍らにいたルアは、伯爵と握手すると、得意げにそう言った。

差し出された彼の大きな手を取って握手したとき、私たちの視線が合わさった。

途端、必要なコミュニケーションのやり取りが一瞬のうちに行われ、伯爵からのメッセージが、データのダウンロードのようにして私に伝わってきた。

微笑んで握手しているだけの、無言のやり取りだった。

「そうだったのですか...」

私は言葉に出してそう言い、伯爵の大きなからだを抱きしめて彼に感謝した。

伯爵は、微笑んで、

「では、ご案内いたしましょう」

とだけ言葉で言うと、私たちをいざなった。

ジェルマン伯爵によれば、私がこうしてアルタイルに導かれたのは、今回得たすべての情報を地球に持ち帰り、人々にそれを提供するためだった。それによって、地球外に生きるほかの星の存在たちが、私たちの星のことを心配し、彼らにできることをしながら、地球の人々とともに歩んでいこうとしていることに、そろそろ本気で気づいて欲しいということだった。ただ、気づくだけで十分なのだそう。そうすれば、必要なことは、自然と行われ、それが結果的に地球も彼らも助けることになるのだという。

もう一つの大事なメッセージは、これまでに何度も登場してきた、神聖幾何学に関するものだった。

夏の大三角において、ベガとアルタイルの間を、地球から1500光年離れたデネブが取り持ったように、冬の大三角においては、シリウスとプロキオンの間を、500光年離れたペテルギースが取り持っている。春の大三角では、250光年離れたスピーカがアルクツールスとデネボラを取り持つという。ベガとアルタイル、シリウスとプロキオン、アルクツールスとデネボラは、それぞれが、互いに同族異星の関係であり、地球までの距離も、8.7~40光年と仲介者たちよりずっと近く、この点でもこれら三つの三角は相似の関係にある。

夏の大三角は天空を表し、鳥類の姿をとる。冬の大三角は、地を象徴し、その姿は神聖幾何学の形をとる。春の大三角は人、神を象徴し、動物や植物、人や女神の姿をとるといふ。天・地・人（神）は、三つで一つなのだといふ。

夏と冬の大三角二つが、ダビデの星とも呼ばれる六ぼう星を構成し、春の大三角が、それを立体化したマカバの構成を意味するのだといふ。神聖幾何学である三角形や六ぼう星、マカバが、宇宙を構成する基本要素であり、平和で調和した社会、文明を築くために不可欠な原則なのだといふ。旧約聖書で自らを「在りて在るもの」と表現した神が形を取ったもの、それがこれら三つの神聖幾何学模様なのだそうだ。地球の人たちには、これらの大三角を構成する星たちをもっと意識することを、彼らは切に願っているのだ。彼らの存在について、真剣に調べてほしいと思っているのだ。

私たちは、雲のように柔らかい階段を登り、やがて拝殿に着いた。拝殿の先には祭壇があり、祭壇には七つの聖なる炎が、静かに降る雪のように美しく燃えていた。その周りには、異なる十二の石でできた十二の玉座があり、それぞれに神官が座っていた。

ジェルマン伯爵は、その中の一つの座に戻ると、威を正してこう言った。

「よきかな！こと、すべて成りたればなり！」

それまで異なって見えていた十二人の神官が、すべてジェルマン伯爵の姿になった。横にいるルアまでもが、伯爵の顔かたちとなった。水晶の拝殿に映る私自身も、彼の姿に変わっていた。

それから、伯爵の姿は次第に薄れ、祭壇にある七つの炎と同じ姿になった。

誰もが、同じ、一つの炎になった。

炎は、初めから一つだけであり、永遠に自分だったことを知った。

ふと気がつくと、アルは自分の部屋のカウチで、ずっと横になったまま眠っていた自分に気がついた。

明けの空を昇り始めた太陽が、子午線の高さに南中したほどの時間が過ぎただけだった。

(すべては夢だったのだろうか...)

出会った存在たちも、体験したすべての出来事も、世界も、次元も、宇宙船も、医療班の海も、アルタイルの太陽神殿も....

何もかもが、自分が創り出した創作であり、夢だったのだろうか....

つまりは、すべては、自分の中だったというのだろうか...)

次の日からしばらくの間、アルは沈黙し、静寂が彼を包んだ。

会社に行っても、この体験のことは、誰にも一切口にするのではなく、それまでと同じように日々を淡々と働いて暮らした。

家では、この夢の内容を思い出しては詳細に記録し、後に小さな出版社から自費出版した。

そして、母や妹と過ごす時間を何より愛し、大切にした。

それから数十年後、アルこと片山始は、ごく普通の社会人として勤めをまっとうして引退し、誰に知られることもなく、平凡にこの世の人生を終えた。

彼の書いた本が、その後どれくらいの反響を呼んだのか、果たしてベストセラーとなったのか、それともほとんど人に読まれることがなかったのか、この物語を伝え聞いたわたしにもわからない。

何しろそれは、どこかとても遠い宇宙の、地球という星の、遥か昔のお話なのだから....

お・わ・り

【2015-02-15】 ブルー・アルタイルを一杯

<http://p.booklog.jp/book/94930>

著者 : b-svaha

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/b-svaha/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/94930>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/94930>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ